

## 「子どもたちが危ない」から始まった環境活動

ヤシャブシのアレルギーを勉強する会を開催し、通学路を点検してみると、そこにはアレルギーを発症させるといわれているヤシャブシが覆いかぶさるように生えていました。そこから、動き出したお母さんたちと地域の自治会協議会が窓口になり、宝塚市との協働が始まりました。中山台コミュニティ緑化活動部会長の庄司さんと内田さんにお話をお聴きしました。

### 一人の声はみんなの悩みだった

成長が早いヤシャブシの木は、斜面のあるニュータウンの造成時には欠かせなかった樹木。当時の中山台ニュータウンには、2万本近くが群生していた。このニュータウンに転入し、アレルギー症状が悪化した住民が、医師から原因はヤシャブシと診断されたのが平成6年（1994年）。そのことをもとにヤシャブシに関する勉強会が始まった。第1回の勉強会には100名以上の人が集まり、声には出さずにいたが悩んでいた人が多かったことが分かった。通学路の点検をしてみると、多くの通学路がヤシャブシに覆われていることが判明。「子どもたちの健康が危ない」とお母さんたちが動き始め、活動資金の確保のため染料になるヤシャブシの実を、京都の染物業者に販売をしながらアレルギーの会を結成して活発な動きがスタートした。

### 伐採するのは市民、ごみ処理は行政

宝塚市では、6部署が関わっていた担当窓口を環境部に統一し、この問題に取り組むこととなった。「解決」を一緒に考えるテーブルに行政が参加したのは、地域全体でこの問題を考えようとする住民の想いだったのかもしれない。業者に見積りをとったところ、全てのヤシャブシを伐採するために必要な費用は約4億5,000万円と見積もられ、予算が確保できないという新たな課題を皆で抱えることとなった。

これに対して、住民アンケート、アレルギー調査、署名活動などを実施しながら、地質、植生、環境保全などの専門家を交え、行政と一緒に学習会を重ねていった。

平成7年（1995年）、中山台ニュータウン自治会協議会の中に「緑化環境対策部」（のちに中山台コミュニティに属する）を立ち上げ、伐採するのは市民、伐採後のごみの処理は宝塚市と役割分担を

し、中山台の環境整備の協働の取り組みがスタートした。

### 本当の目的は、住みやすいまちづくり

10年余りでヤシャブシの伐採が一段落。その後は緑化環境の維持管理へと主軸を移した。きれいで健康的なまちづくりのための環境活動に終わりは無い。23回継続している、年に1度の市職員参加の環境整備活動「行政と共に」では、市役所では見たこともないような笑顔で時間を忘れ一緒に取り組む職員さんが多いとのこと。きっと、住みやすいまちづくりという共通の目的があるからではないだろうか。そして、市民同士の協働・市民と行政の協働の結果、平成27年（2015年）12月、中山台ニュータウンとその周辺が「中山台のまち山」として環境省から全国500カ所の生物多様性保全上重要な里地里山の1つに選定されたのである。



「行政と共に」作業開始



伐採は住民、その後の処理は市役所



キレイな街並みの保全

市民と行政でできることを分担しているんだね

